

2020年度「学校を核とした地域力強化プラン事業成果報告会」

# 学校と地域の繋がりを再考する



**2021年1月22日（金）**  
**滋賀県CSアドバイザー**



**滋賀県庁東館7F大会議室**  
**高木和久**

私たちは、これからの社会の変容と、目の前の子どもの姿を踏まえ、どのような教育を目指すのか明確にすべきでは！

## 敗戦後の教育の変遷(概要)

### 学校教育

### 社会教育・生涯学習

- 1945・GHQの教育政策～民主主義教育の出発～ \* 米国教育使節団の報告書  
「新日本建設の教育方針」 文部省に社会教育局設置、各都道府県に社会教育主管課設置
- 1947～ 学校教育法・新学校制度の設置 **「コア・カリキュラム（経験主義）」の問題解決学習実施**
- 1948～ 教育基本法制定・公布 1949～ 社会教育法制定 後：図書館法・博物館法制定
- 1971～ 高度経済成長下の教育 系統教育の詰め込み教育が「落ちこぼれ、校内暴力」を生む
- 1974～ **家庭教育・学校教育・社会教育の三者の有機的な統合：「生涯学習体系への移行」**
- 1980～ 留まることのない高度経済成長禍の中、校内暴力・家庭内暴力が益々増加
- 1995～ **授業時間の削減と「ゆとり教育」総合的な学習時間の設置** 学歴社会から学習社会への転換  
不登校・いじめの拡大 **完全学校週5日制の実施と体験活動の推進**（子どもは休日になるが、大人は仕事）
- 2000～ PTAを主とした**「家庭教育学級」の推進**。地域では、「**地域教育協議会**」等の事業が提唱され、全国で様々  
な組織が生まれたが、非行防止や交通安全の見守りであったり、イベントによる「体験活動」、地域清掃の奉仕活動が主となり、青少年の主体的な学びの高まりとはならなかった。
- 2006～ 内閣に「教育再生会議」が設置され、**「ゆとり教育」や「学校週5日制」の見直し**などが提言された。  
\* 期待された公民館が行政改革で職員が減り、公設民営のコミュニティセンターがどんどん増加、生涯学習と言うより、イベント中心  
学校教育・地域教育・家庭教育を統合的に高める制度**「コミュニティ・スクール（学校運営協議会）」**が開始
- 2009～ **「学校支援地域本部事業（現：地域学校協働活動）」**の補助事業が開始され現在に至っている。
- 2017～ **学校の学習指導要領（総則）の中に、コミュニティ・スクールを位置づけ、「開かれた学校」から「社会に開かれた教育課程」とし、その取組を「努力義務」とした。**このことは、学校改革と地域創生の両面の向上を期待する施策が軸となるが、誰がどのように推進していくのかこれからの学校と地域の人材育成が大きな課題となる。

# これから学校運営協議会を設置する 市町村及び学校・地域

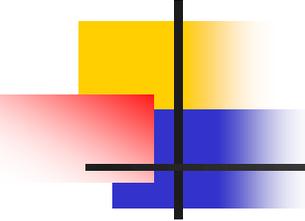
## 【訪問時によく出てくる話】

- 教育長から2022年にはCS導入をと聞いている。
- そろそろCSが「努力義務」から「義務化」になりそうだから。
- 周囲の学校のCS導入が増えだしたから、本校も考えなければ。
- 「新学習指導要領もスタートしたからCS導入を」の話はあまり出てこない。

## 【気になる声】

- ・市町村教育行政の「学校教育」と「社会教育」の連動システム（生涯学習体系）は出来ていない。（担当課は決まるが、CS及び地域学校協働活動を維持、発展させていく行政機能は皆無）
- ・「学校評議員」を名称変更し「学校運営協議会」に！
- ・学校運営協議会の運営は、教頭や担当者任せ。年間及び長期ビジョンは誰が創るのか。
- ・「熟議」もそこそこに「すぐに学校運営協議会の設置」で学校主導のシステムづくり。
- ・学校運営協議会の開催は、年3回程度。 ・学校運営協議会委員の選任が難しい。
- ・地域学校協働活動を実施してきたので、そのまま「学校運営協議会」に。

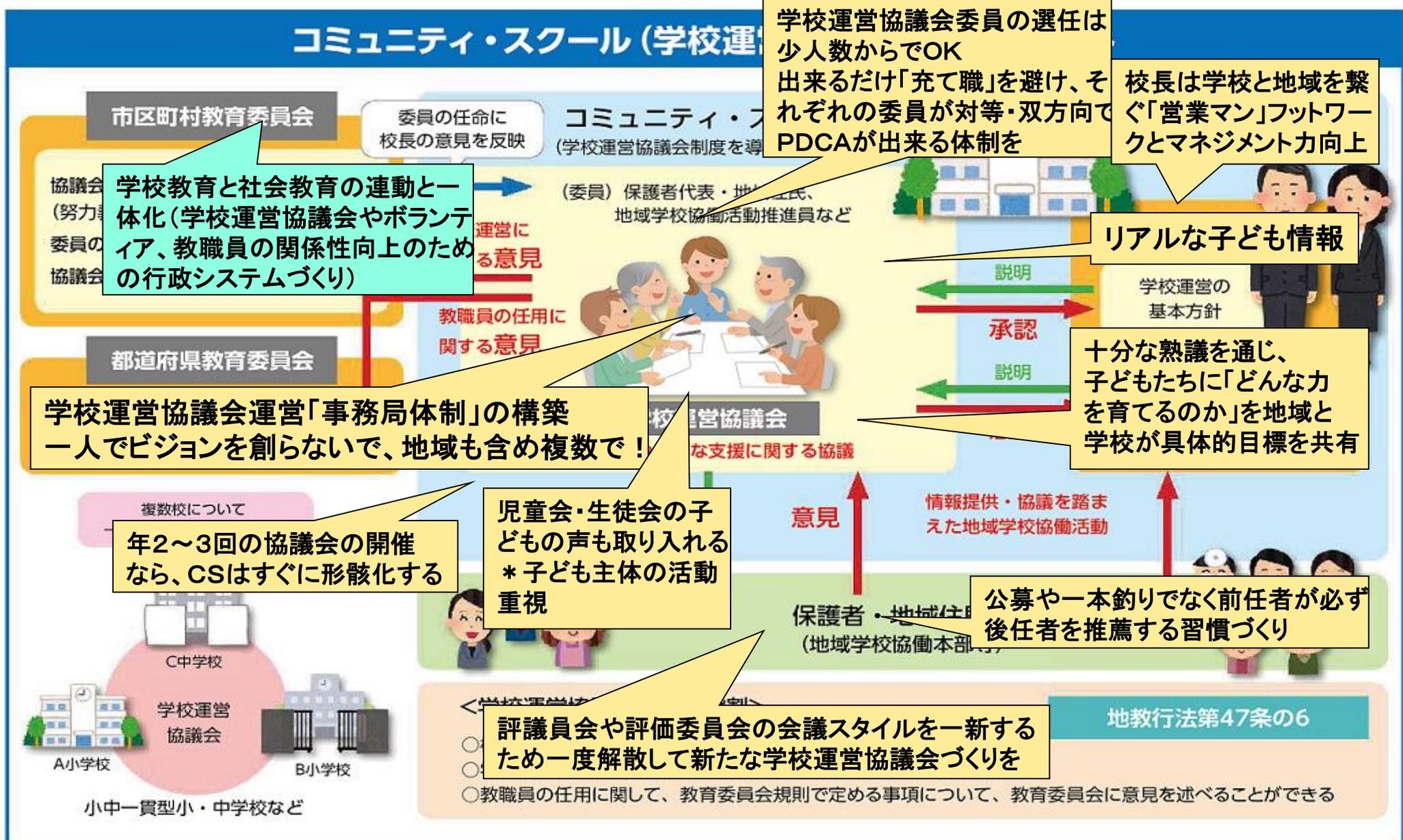
CSを設置することが目標ではなく、教育改革・地域創生のためのツールであり、「子どもたちにどんな力をつけるのか」の目標が学校と地域で共有でき、学校運営協議会に目標達成のPDCA機能がなければすぐに形骸化していく。



# コミュニティ・スクールは、「教育改革」や 「地域創生」のためのツール《手段》

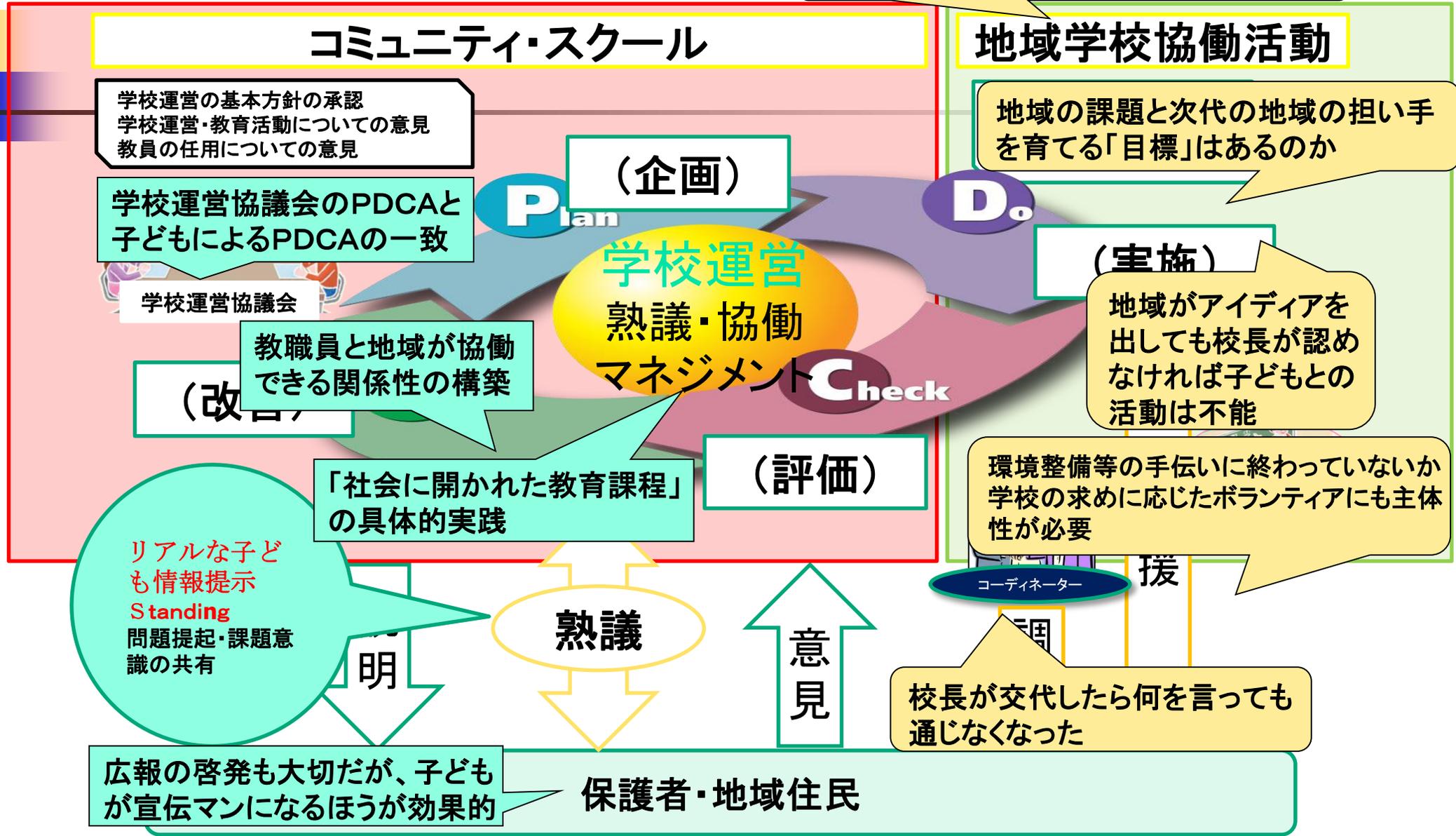
- 学校と地域が熟議し、「子どもたちにどんな力を育むのか」の具体的な目標が共有されなければ、組織だけ創るのは時間の無駄。
- **学校**では、新学習指導要領の目標「社会に開かれた教育課程」の具現化のために、カリキュラムマネジメントの工夫・実践の仕方を地域とともに構想。
- **地域**では、これからの予想される地域社会の現実課題を解決するために「次代の地域の担い手の育成」を目指し、学校と協働する。
- 子どもへの「支援」から**「主体性重視」**へ。

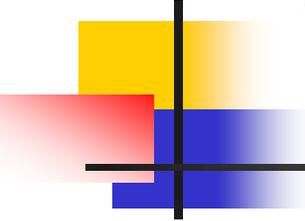
# これからコミュニティ・スクールを設置される 学校・地域・行政のマネジメント



# 今日までの地域学校協働活動と学校運営協議会の相違点と手順 と S・P・D・C・Aサイクル

事務局体制の構築と月一回程度のミーティング



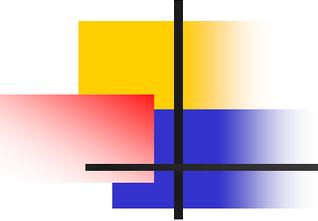


# 設置されて数年経過した 様々な課題を感じるCSへ

## 【訪問時によく出てくる話】

- 学校の担当者が会議の準備や資料の準備をしなくてはならないので負担感が多い。重ねて学校運営協議会委員の当事者意識をどう育てるのか。
- 学校運営協議会の委員は意見は求められるが何をしたいか不明。(年に3回学校運営協議会を開催しているが、案内が来て行くだけである)
- 設置時の学校長が定年退職し、新しい校長は何も言わないので、活動が停滞している
- 学校運営協議会の議事内容は、全て学校が決めているが、学校運営協議会は何をするところなのかわからなくなることがある。
- 教職員に聞いてみると、学校運営協議会は管理職が出ているので、どんな話し合いが行われているのかよくわからない。
- 子どもたちや保護者にコミュニティ・スクールのことを聞いても首をかしげ答えがない。
- CS研修会で「社会に開かれた教育課程」のことを聞いたが、何をどうするのか、学校側からは何も話題は出てこない。
- 活動を設定したのは良いが、行政が準備する予算ではとてもまわらず、経費捻出に困っている。





---

# 地域では

- ・目標の明確化(学校との共通テーマに)
- ・課題やシステムの再構築
- ・民主的な地域づくり

## 現在の子どもたちが地域の担い手になるとき 地域の願いや地域の目標は？

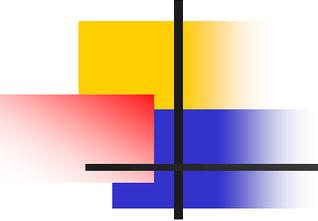
現在の子どもたちが、地域の担い手になるとき、高齢化率は30%を超えることは  
確実。残り約70%の内の半分は青年及び子どもで、約35%の労働者である現在  
の子どもたちが、介護、子育て、自治を支えていけるのか？

その担い手を育てることが、地域の役割ではないか。

- 新しい地域の、自治の不成立。(リーダー不足・役員の高齢化)
- 旧の地域の過疎化とこれからの自治の運営の困難化(少子高齢化)。
- 外国籍の人々の共存課題と自治。
- 安全・安心の豊かな地域の確立。

**\* 次代の地域を担う子どもたちを育てるために、**

**「支援」から「子どもがRPDCA(主体的活動)」と「協働」が約束出  
来る地域を創る。**



# 地域の子ども活動の弱点

---

- 招待型活動: なにもかも大人たちが準備
- 打ち上げ花火型活動: 面白そうな行事を大人が用意
- 帳面消し型活動: 一年交替の役員が去年をまねて実施
- おもらい型活動: お菓子やジュースで子どもをつる

# ぶれてはならない子ども観 「良い子」ってどんな子

- 地域・学校・家庭の大人は、どんな子どもを育てたいと思っているのでしょうか？
- 多忙さの中で、自尊感情の育成や、自己肯定感の育成と言いながら、ややもすると、「いつも笑顔で大人に忠実・従順」な子どもを、そして「失敗はしない、させない」子どもを目指していませんか？

「あいさつはいつも明るくはっきり」「忘れ物は無し」「言われたことは確実に」「仲間の中では決して主張せず周りに気遣い、思いやりを」

地域の抽象的な目標設定「子どもの健全育成」「早寝・早起き・朝ご飯」等の言葉は知って共有しているつもりだが、私たち大人はどんな子どもを目指しているのか、今一度問い直すべきでは！

## ・日本の自立観

何でも一人で出来るようになる事

## ・北欧の自立観

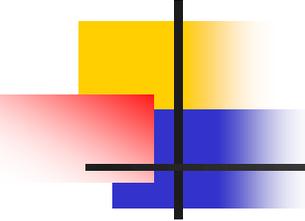
「自立とは、誰もが、地域社会のなかで、個別のニーズや意識、希望などを最大限尊重した最善の支援を受けながら、自らの人生の主体者として生きること」また、「助けて」が言えること(他者に依存出来る力を持つこと)、助け合う関係性(共助)が確立できること

# 地域・学校での 支援ボランティアの様々なレベル

- 学校に依頼されたことだけをひたすら手伝うボランティア
- 子どもの笑顔に魅せられ、子どもの依頼に応えるボランティア
- 子どもとの会話を楽しみにやりがいを感じるボランティア
- ボランティア仲間とつながることに楽しみを得るボランティア
- 子どもに教えることから自己実現を図ろうとするボランティア

↓↓ ..... **新学習指導要領に必要な力** ..... ↓↓

- 学校運営協議会で決まった「子どものどんな力を育てるのか」の目標達成に向けた工夫ができる
- 自分に与えられた支援手段を契機に、子どもの意欲や行動を引き出すことや、子ども同士の関係性高めようとするボランティア（子どもの活動や関係性をファシリテートすることを大切にする）
- 支援ボランティア仲間チームを形成し、手伝いではなく子どもの自己有用感を促し、子どもの教育課題を解決するための方策を工夫し企画ができるボランティア集団
- 子どもの「主体性」や「自主性」を促し、子どもが「何を、どのように学び」「何ができるようになるか」等の新学習指導要領の目標達成や教育課題の解決をめざすボランティア（地域創生のための目標を含む）



---

# 学校では

- 新学習指導要領の推進(カリキュラムマネジメントの実施)
- 「社会に開かれた教育課程」の実現で  
子どもの「主体性」と「協働」出来る力を育む

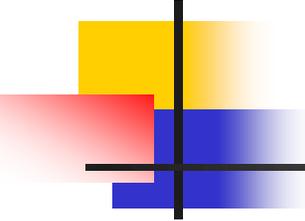
# 今後、社会において求められる能力

参考：学習指導要領改訂における3つの視点

- 社会の激しい変化の中でも、何が重要かを「主体的に判断」できること
- 多様な人々と「協働」していくことができること
- 新たな価値を「創造」していくとともに、新たな問題の「発見・解決」につなげていくことができること

## 子どもにつけたい力のヒント

○主体性    ○集団自治力    ○協調性    ○社会性  
○魅力ある人との出会い    ○自己有用感の育成    ○地域貢献・奉仕の志 等



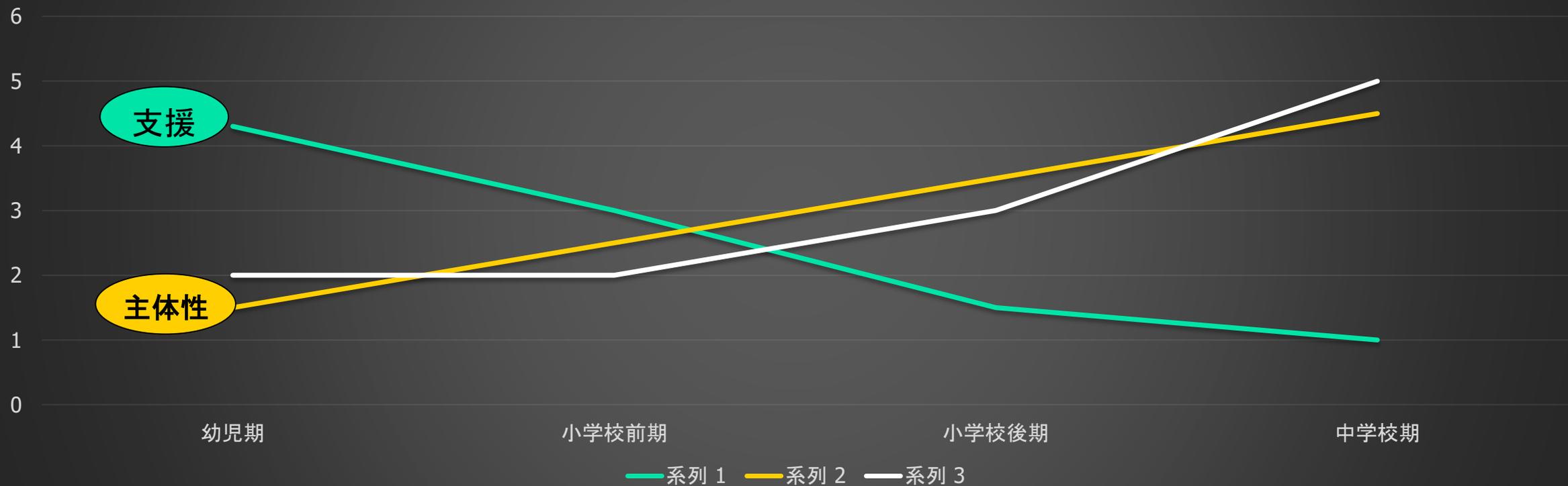
## 新指導要領がめざす「主体性」と「自主性」

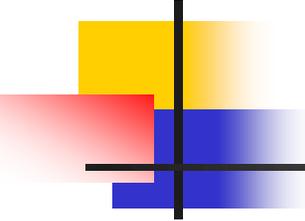
---

- 「自主性」とは、他人からの干渉や保護を受けず、独立してことを行うこと。もう少し噛み砕いて説明すると、自主性は単純に「やるべきこと」は明確になっていて、その行動を人に言われる前に率先して自らやることである。
- 「主体性」とは、様々な状況下においても自分の意志や判断で行動するということ。つまり「主体性」は、何をやるかは決まっていない状況でも自分で考えて、判断し行動するということになる。主体的な人とは「目的は何かを徹底して明確にし、それを満たすために何をするかを自分で考え、リスクを承知で行動すること」ができる。

# 子どもたちの主体性と協働の力を育む

支援から主体的活動へ





# 「社会に開かれた教育課程」と カリキュラムマネジメント

- ① **目標達成に必要な内容の組織的配列**: 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標達成に必要な教育の内容を組織的に配列する。
- ② **教育課程のPDCAサイクルの確立**: 教育内容の質の向上に向けて、子どもの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立する。《サイクルの運用には、エビデンス(根拠データ)に基づく取組が定着するよう、検証に繋がるR《調査=リサーチ》とそれに基づく策定の(改善)のV(方針=ビジョン)を明確にすること》
- ③ **地域の教育資源の活用**: 教育内容と教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせる。

# 学習指導要領改訂の考え方

新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実

学びを人生や社会に生かそうとする  
学びに向かう力・人間性等の涵養

生きて働く知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる  
思考力・判断力・表現力等の育成

何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し  
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む  
**「社会に開かれた教育課程」**の実現

学校における「カリキュラム・マネジメント」の実現

何を学ぶか

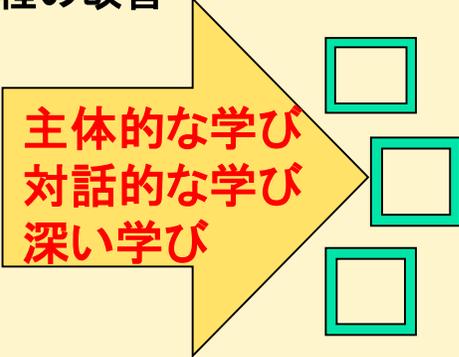
新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた  
教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

- ・小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共」の新設など
- ・各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造的に示す
- ・学習内容の削減は行わない

どのように学ぶか

主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習過程の改善

- ・生きて働く知識・技能の習得など、新しい時代に求められる資質・能力を育成
- ・知識の量を削減せず、質の高い理解を図るため学習過程の質的改善



# 学校と地域の関係は？

- 「双方向」と「対等」を大切に！

「熟議」と「協働」

学校「教育改革」

子どもの教育課題を  
解決する

子ども

地域「地域創生」

10年～20年後の地域を  
担う子どもを育てる

学校での特別活動・総合的な学習等

学校運営協議会

地域で子どもの主体的・協働活動

学校を応援するだけでなく、学校の子、地域の子、それぞれの立場で子どもの課題を共有し、子どもを育てる目標を共有すること！！

## 例) 地域と学校の具体的共有目標を明確に!

子どもは、どこへ行っても「お客さん」

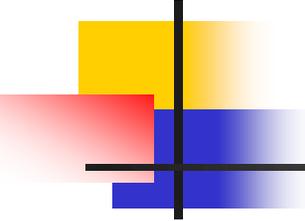
お客さんからの脱却する家庭・地域・学校づくり

- **家庭**では、「お手伝い」でなく「家庭の一員としての仕事」を。
- **地域自治会**では、子どもを「自治の一員」として向き合い託しましょう。
- **学校**では、「自分のことは自分でします。」「自分で出来ることは手伝いません。」

学校・地域・家庭が子どもを育てる視点を共有し取り組みを積み上げる

家庭・地域にも理解しやすい「具体的な目標の設定」を「熟議」でめざそう

\*「社会に開かれた教育課程」の実現は、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で



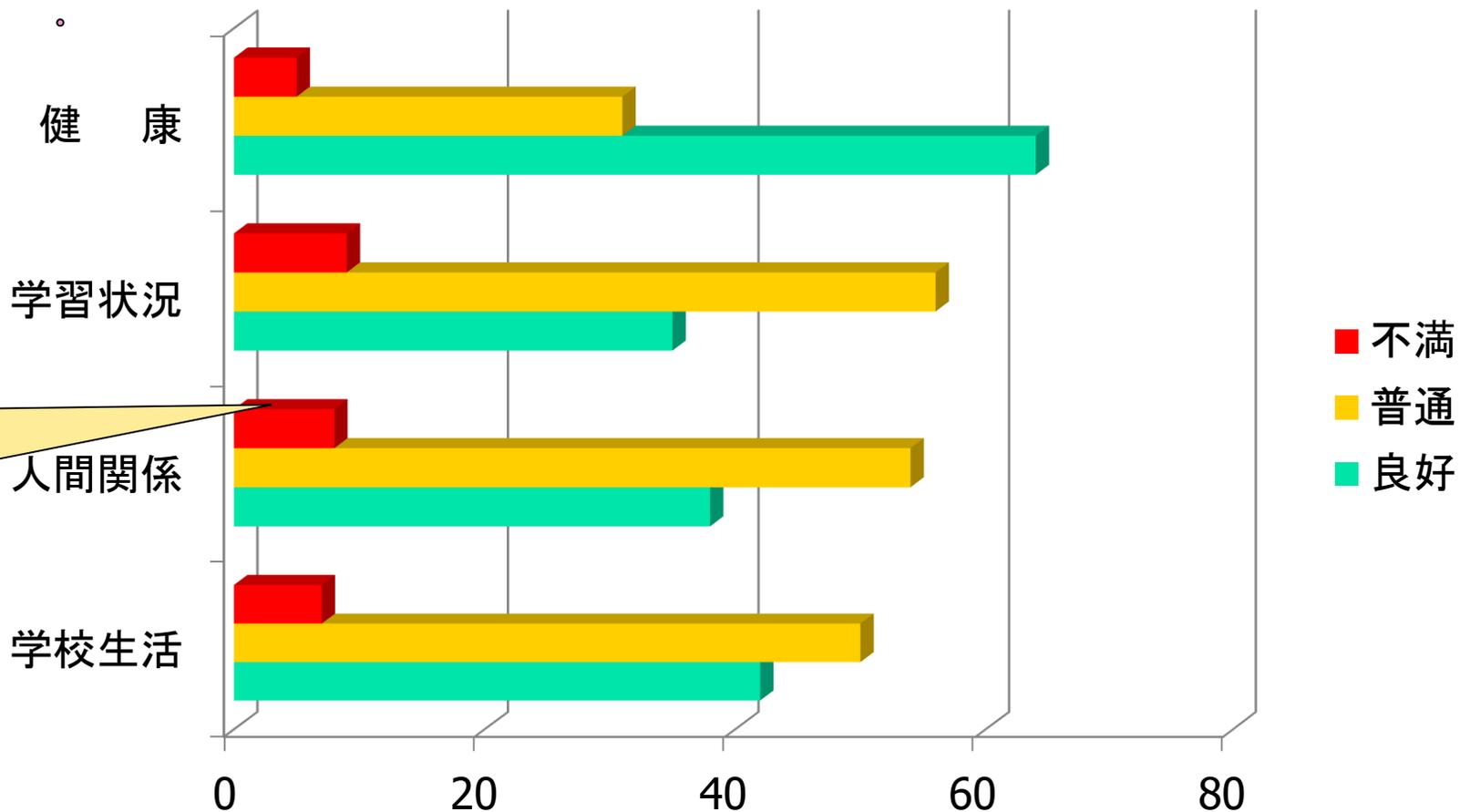
---

「社会に開かれた教育課程」を実現するためのカリキュラムマネジメントの作成

# 実 践 編

細やかなリサーチ(調査R)と視点を少し変えた評価も必要!

## 私たち大人の目のつけどころを少し変える



出来たことも大切だが、「不満」な子どもたちに視点を当て取り組む

月一回のミーティング(茶話会)

# 特別支援ボランティア

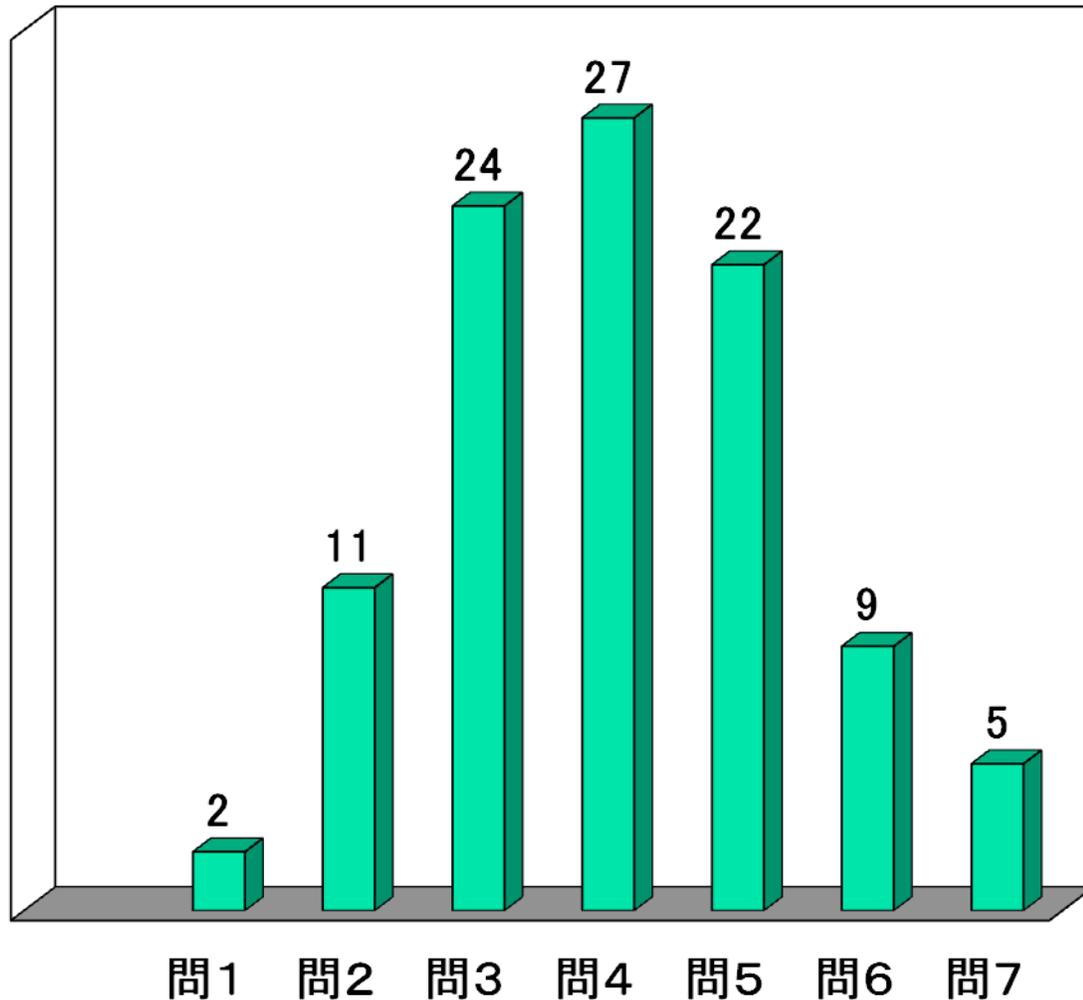
市町教委では、  
教職員研修と  
特別支援ボラン  
ティア研修を重ねて実施も可能に



管理職・担当者の「受容力」がなければ成り立たない。

学校が実施する調査は形式的！地域主体の調査も出来る校長の「託す力」度量も必要

## 家庭での「積み上げ学習」実態アンケートより



No	質問内容
問1	塾に通わせているので十分である
問2	家庭でドリル学習等実施している ので十分である
問3	忙しくて見てやれていないが、 子ども自身が努力している
問4	忙しくて見てやれていない
問5	ほとんど子ども任せである
問6	子ども任せで不安である
問7	その他(言っても勉強しない)

87%が不安！

# 家庭学習の積み上げ支援

「土曜教室」 2・3年生対象

何度も試行し出発



学力の二極化をどう克服していくのか??

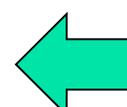
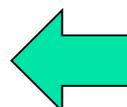
## 支援対象児

- \* 家庭で学習環境がない子
- \* 経済的に不安定で、学童保育所や 塾等にも行けない子
- \* 学習補充の必要な外国籍の子
- \* 学習の二極化で底辺にいる子

地域の退職教職員

学習支援ボランティア

地域の大学生



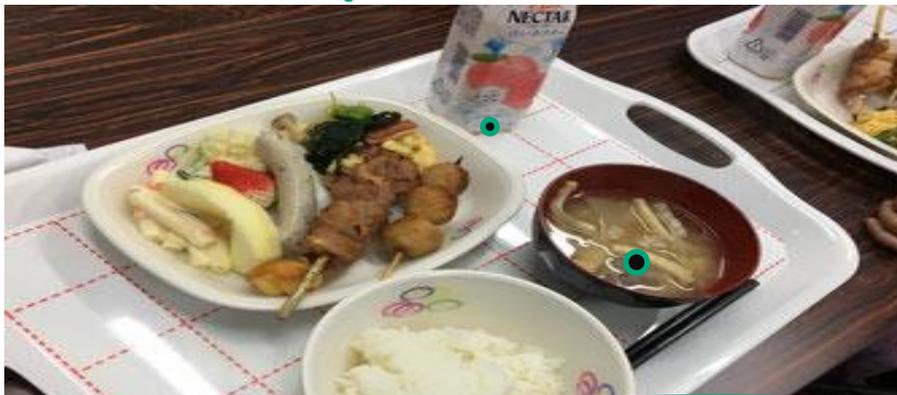
地域の施設活用！ 退職教職員をリーダーとして！

マンツーマン  
指導を基本として



子どもの生活を支えるために、「福祉の視点」も踏まえた取組に

## 孤食・欠食児童を地域で支える（学習会+子ども食堂）



コロナ禍を踏まえこれからの子どもたちへのしかかる  
絶対的・相対的貧困の課題にどう対応するのか？

# 子どもたちのPDCAで 地域の一員として参画・貢献

コミュニティ・スクールを理解して  
もらうための子どもによる宣伝

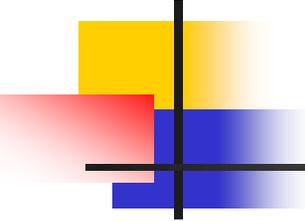


「高齢者サロン」  
と  
「ホタルまつり」



社会に開かれた教育課程の実践





# CS運営で大切にしたいこと！

- コミュニティ・スクールとは？を子どもたちが認知しているのだろうか。地域の人々に知って貰う前に、教職員が子どもに伝えるスキルを備えること。
- 学校運営協議会及び地域ボランティアの主体性を尊重し、学校管理職が地域に「託す力」をどれくらい持てるか。また、教職員が地域の人々といかに「協働」してカリキュラムマネジメントの作成ができるか。
- 市町教育委員会は、担当課や一人の担当職員に任せるのではなく、学校教育と社会教育を繋ぐCS推進のための少し重ねた行政システムの再構築が必要。